

共生・公正・創造



# ユニオン・EYE

<http://www1a.biglobe.ne.jp/jrtu-EWU>

ジェイアール東日本労働組合  
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号  
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290  
発行者/今井 伸 編集者/久保田勉

“異形の労働組合指導者『松崎明』の誤算と蹉跌”

## 「国鉄改革の裏側」ダイジェスト版 第23回

あの元国鉄労働課長が明かす「国鉄改革の裏側第6弾」が【異形の労働組合指導者「松崎明」の誤算と蹉跌】という本になった。本紙は筆者（宗形明氏）の了解を得て、『JR東日本革マル問題の真相と現状』をダイジェスト版として紹介することとした。



### おわりに

ほぼ20年の間、続けられてきた「JR東日本」と松崎「JR総連・東労組」との緊密な労使関係、私の言葉では【住田・松田・松崎癒着に起因する“東労組オンリー”の労使関係】には、事柄の是非は別にして、少なくともそれが許容されるための社会的前提条件があった筈である。その前提条件とは、「松崎明は革マル派とは無関係」、「東労組に革マルはいない」、「JR総連・東労組は革マル派と関係のある者たちに支配されていない」ということ。換言すれば、政府の公式見解や歴代警察庁警備局長の国会答弁、「左翼過激派“革マル派”がJR総連や東労組に深く浸透している」、「JR総連、東労組内において影響力を行使でき得る立場に革マル派系の労働者が相当浸透している」は、事実ではない。根も葉もない“デマ”であり、“デッチ上げ”である、ということだ。本書は国民に多大の犠牲を強いた「国鉄分割・民営化」という重い歴史を背負ったJR東日本の労使関係において社会的に許容されるためのその「前提条件」が“全くの虚構”であったことを証明・報告したものである。

特に、国鉄改革に際して、私は中央鉄道学園教育企画部長として当時の国鉄重要施策、企業人教育の実務を所管、多数の青年職員を前途の多幸を祈念して政府機関や地方公共団体、民間諸企業などに送り出した業務経験がある。ところがその数年後、それら青年職員の内でNTTが協力、雇傭して下さった中の2名（動労所属）が、変貌、逮捕・起訴され、「NTT・顧客情報窃盗流用」事件被告として登場・有罪になったという仰天の事態に遭遇した。その時、はじめて私は、国鉄分割・民営化直前の有名な【松崎・動労のコペルニクスの回転】の裏側に、重大な国家施策に便乗した革マル派の壮大な戦略展開（国家機関、地方自治体などの公的部門、民間企業等への組織拡大戦略）があったのだということに気付き、愕然としたことを書き記しておかなければならない。国鉄改革前のある時期、国鉄の職場規律が崩壊し、国労と動労に対してマスコミを中心に国民の厳しい批判の目が向けられ、非難の声が集中したことがある。国労と動労が特に悪者視された時代があったが、良くも悪くも、【労働組合は、対応する経営・企業の“質”の反映】である。「国労と動労を“悪くした”のは国鉄当局だった」というのが、国鉄労働関係業務一筋に生きてきた私の経験に基づく実感である。そしてこれは、「JR東日本と東労組との労使関係」の現状についても同じことが言えると思う。私が最近読んだ本の中で、心に残った一節がある。「ペリー来航やソ連参戦には事前情報があった。しかし、日本人には、たしかかな情報があっても、起きたら困ることは起きないことにする病癖があつて失敗した」<半藤一利著『幕末史』（新潮社平成21年）>

私は、かつて「国鉄」に恩恵を受けた者として、私にとって「わが愛する国鉄」の後身である「JR東日本」の“革マル問題”を解決し、JR東日本を「松崎呪縛」から解放するためにやるべきこと、出来ることはすべてやったと思っている。後はJR東日本経営陣の“経営哲学”と“志”の問題である。

終

【異形の労働組合指導者「松崎明」の誤算と蹉跌（高木書房）P.220～P.221】